平成16年度 日本色彩学会 関西支部大会 池田光男先生Judd賞受賞記念講演会

関西支部

関西支部主催の第1回支部大会は、納谷嘉信先生の発案により昭和46(1971)年、中央電気クラブで開催されました。以来、支部として全国大会を担当しない年度には支部大会を開催することを恒例とし、2004年度の支部大会は第23回目の開催にあたります。

今回の開催日は2005年2月9日(水)、開催場所はJR京都駅前のキャンパスプラザ京都、参加者は正会員・学生会員・一般を含め53名でした。発表件数は10件、うち関東地区からも2件の参加があり、活発な論議がなされました。発表内容は下記各セッションの概要を参照願います。

関西支部大会では、口頭発表に続き特別講演をおくことが特徴のひとつでしたが、今回は特別講演にかえて、2003年度にJUDD賞を受賞された池田光男先生に、JUDD賞受賞記念講演をお願いしました。いうまでもなくJUDD賞は、世界的な色彩研究に授与されるもので、第1回(1975)の受賞者は Nickerson、以下 Wright, Wyszecki, MacAdam, Hurvich & Jameson など、名だたる色彩研究者が受賞者として名を連ねています。授賞は1度の例外を除き2年毎に行われていますが、2003年までの14回の授賞中、日本人としては池田先生のほか、1989年印東太郎先生、1993年納谷嘉信先生の3名の受賞者を数えます。このことは、日本色彩学会として大いに誇るべき業績といわねばなりません。なお大変興味ふかかったJUDD賞受賞記念講演「照明認識空間の概念に基づく色の見えの説明、予測、実験」の内容は、池田先生より本号に寄稿いただいておりますので、ご参照ください。

(文責：緒方康二)

(日 時) 2005年2月9日(水) 10:15~16:30
(会 場) キャンパスプラザ京都 4階第4講義室
(次 第) 開会の辞 支部長 緒方康二

<関西支部大会>

第1セッション 座長 井上正之(広島工業大学)

(1) 感性語と画像の色彩による関連付けと画像検索への応用

北島吾郎(大阪電気通信大学大学院)

土居元紀(大阪電気通信大学)

様々なメディアがコンピュータネットワークを介して配信されるようになり、今まで個別に扱われてきた画像、音楽、文章等のメディアに対し、関連付けを行って相互検索を行う必要性が生じてきた。筆者らは、決まったメディア間だけではなく、様々なメディア間での関連付けに適用できるということを考慮して、感性語を介したメディアコンテンツ間の関連付けに注目した。そこで、色彩による画像と感性語の関連付け、またそれを応用した類似画像検索の一手法を提案した。本手法では、感性語をそれに対応する画像群の色相、彩度、明度に関する色彩ヒストグラムで表し、画像の色彩と感性語の色彩ヒストグラムとの相関関係を調べることで画像の持つ印象を表現する。そして、さらに画像とその画像の印象を表す感性語に対応している画像群との相関関係を調べることで、印象が一致しかつ色彩が類似した画像を検索することができるシステムを構築した。

(2) 光学的モデルに基づいたファンデーション塗布色の推定

大槻理恵(大阪電気通信大学大学院)

土居元紀(大阪電気通信大学)

化粧効果を考える上で化粧品を皮膚に塗布したときの色(化粧品塗布色)の予測は重要である。そこで、本研究では化粧品の光学的特性や素肌の色が化粧品塗布色にどのように影響するかということを考慮し、皮膚と化粧品塗膜層の2層の光学的モデルに基づいたファンデーション塗布色の推定手法を提案する。

提案手法はKubelka-Munk理論に基づいており、化粧品の分光反射率から算出した散乱係数、吸収係数と素肌の分光反射率を用いて化粧品塗布肌の分光反射

率を推定する。

実際に被験者5名に対し、6色のファンデーションを塗布した肌と素肌の分光反射率を計測し、算出した係数を用いて化粧品塗布色の分光反射率を推定した。

その結果、精度の高い分光反射率の推定を行うことができた。また、推定手法を応用して、頬を対象に素肌の分光反射率から化粧品塗布色の推定を行って表示するGUIを作成した。

第2セッション 座長 松田 豊

(3) “聖なる色彩文化”と“俗なる色彩文化”—遺伝子が“俗なる色彩文化”をつくった—

岡崎信雄

(OKAZAKI Physical Analysis Consulting Office)

古典的精神文化である禅仏教の影響を色濃く受けた不完全の美に古色や古拙味がともなう、わび、さび、渋みの色彩空間にたいし、その対極に位置する極彩色の六色(赤、黄、緑、青、黒、白)に彩られた色彩空間、この二極化した色彩空間を“聖なる色彩文化”、“俗なる色彩文化”としてとらえ、“俗なる色彩文化”は遺伝情報の支配する色覚進化と深い関係があることを示す。神と“俗なる色彩文化”との深いつながり、色覚バリエーションな“聖なる色彩文化”についても論ずる。

(4) 現代英語の基本色名の語源と意味—日英比較表現論の視点から—

吉村耕治(関西外国語大学短期大学部)

現代英語の基本色名*blue*には、「明るい青」と「暗い青」がある。古英語に存在した青色は「暗い青」(*dark blue*を表す *blæhwæn*, *blæwen* など)のみで、英語の言語資料に「明るい青」が現れるのは、1203年の初出例とされる *blue* が古フランス語から借用された時である。*brown* は、印欧祖語の **bher-* (*bright*, *brown*) やゲルマン祖語 **brūnaz* に由来するが、*byrnan* (*to burn*; 燃える) の過去分詞形 *burnen* (*burned*; 燃えた) の音位転換によって生じている。*brown* が茶色だけではなく、黄色から黒に近い色までを含んでいるのは、「燃えた」を原義にしていることに起因する。経験の言語である基本色名は、意味領域が広く、叙述用法だけでなく、弁別用法の頻度が高い。*black*, *white*, *grey*, *blue*, *brown*, *yellow* は、「燃える」を基軸にした明暗に関係する語から生じており、古代日本語の固有色名シロ、クロ、アカ、アオが顕、暗、明、漠を原義にしているのと同様に、明と暗、顕と漠という二項対立が英語

の基本色名の原義にも内在している。

(5) 慣用色名の日中比較研究—物体色の表現における色名の使われ方を中心に—

林嵐娟(大阪市立大学大学院)、佐藤昌子(畿央大学)

慣用色名は、生活や文化と深く関わるため、国や地域が異なると、同じ物体名に由来する色名でもそこから思い浮かぶ色が異なる場合がある。物体色の表現における色名の使われ方についても同じようなことが考えられる。日本と中国の慣用色名のうち、両国で対応する「物体色」について、大学生(日本135名、中国100名)を対象に、物体名から思い浮かぶ色の表現調査を行った。その結果、両国とも「基本語」に基本色名が最も頻繁に用いられること、及び、「修飾語」に色の三属性に関する表現が最も多いことが明らかになった。このことは、基本色名が物体色の表現において重要な役割を担うことと共に、色相・明度・彩度の三属性の認識が両国で似ていることを示唆する。一方、両国において慣用色名の使用率は異なり、日本では中国の2倍以上であった。その理由として、日本では慣用色名が適宜改訂されて実生活に適したものになっているのに対し、中国の慣用色名は収録されてから久しく実生活とかけ離れてきているからと推測される。

第3セッション 座長 佐藤昌子(畿央大学)

(6) 絹糸のテクスチャーと光沢に関する研究

森田美穂(院生)

鈴木健一*、新井宏俊*、馬場護郎*、側垣博明

(女子美術大学、*株式会社 村上色彩技術研究所)

日本刺繍で扱われる絹糸の特性について、色彩科学と被服繊維研究領域を観点に調査、実験を実施した。試料は、日本刺繍用絹糸16色、綿糸4色、綿パール糸4色を厚紙に手動で巻いたものである。調査方法は、OsgoodのSD法を用いて、7名の被験者に評価させた。実験内容は、2つの機器測定である。1つは村上色彩技術研究所の三次元変角分光測色システムGCMS-3Bを本実験に使用した。予備実験では分光式色彩計SE-2000を用いて、模擬実験を行った。また、絹糸の形状を確認するため、東京藝術大学美術研究科保存科学研究室の走査型電子顕微鏡(SEM)を使用した。視感評価結果は、因子分析、クラスター分析の2つの分析結果を総合的に解釈した。物理測定において本実験では、視感評価実験での設定条件と同一条件(入射角0°—受光角45°、縦横の双方向提示)分光反射率を測